書　評・紹　介

John A. Turner

Sustaining Social Security in an Era of Population Aging

Springer, 2016, 117pp.

本書は Pension Policy Center の所長である John A. Turner が米国の社会保障年金制度，通称 Social Security の維持に必要となる改革について言及した書籍である．今後高齢者の増加に伴い税収が減少し，一方で，給付金額が増加するため，現状の Social Security のシステムでは維持が困難となる．これに対して Social Security の長期的維持を実現するためには周期的な改革が要され，また，これを政治的に社会的に許容することも不可欠であると述べている．

現在の Social Security の元となった社会保障システムは1935年にルーズベルト政権のもとで発足されたものであるが，発足当時の想定よりも大幅に高い財政負担が要され，おおむね政府支出の25％にあたる金額が Social Security の維持に費やされている．今後 Social Security を維持するためにはさらに負担が増え，その結果，2035年頃には基金の枯渇により破綻すると予測されている．

これに対し，これまでに政府は多くの制度改革を試みたが，いずれも対症療法的な効果しか得ることができず，本質的な問題解決につながっていない．ブッシュ政権時に抜本的な制度改革を目指したが，批判が多く未遂となった．よって現在までに行われている主な制度改革は増税等により財政的な補助を行うことが主な方法であったが，大きな効果は得ることができなかった．実際にこれまで多くの対策を講じたにも関わらず，先述のとおり，2035年頃までに基金が枯渇し Social Security が破綻すると予測されている．このような背景のもとで，本書では今後 Social Security を維持するためにはどのような方法が有効であり現実的であるか考察している．

本書の構成は以下のとおりである．まず，第１章では本書の目的や Social Security の歴史について概観している．次に，第２章では Social Security がなぜこれまで維持が可能であり，今後は困難であるのか言及している．また，従量制の給付システムを採用することで安定的に持続可能であり，経済的に，人口統計学的に変化した場合も適応可能であることを示している．続いて，第３章では平均余命の変化に合わせ給付金額を見直すことの重要性について言及している．議論の中で消費者物価指数を導入することについてのメリットとデメリットも示している．さらに，第４章では退職の時期と給付の時期の妥当性をはじめとする様々な退職問題について言及している．平均余命の延伸に伴う長寿政策の改革が人々の退職時期にどのような影響を与えているかについても取り上げた．また，第５章では改革過程においても改革の必要があるとしてこれを提案している．最後に，第６章ではこれまでの議論をもとに，Social Security の支払い能力の回復を目的とした改革と今後の展望について言及している．

本書の特徴としては，政策分析で頻繁にみられる個人年金や貧困プログラム，高齢者の労働機会，健康管理といった狭い枠組みを対象とした分析ではなく，平均余命の延伸や所得と平均余命の関係性の強化，所得格差の拡大，高齢世代における貧困パターンの増大といった人口的，経済的変化に基づく構造改革について着目した分析を行っている．また，Social Security の成り立ちから現在までの経緯，さらに，今後の展望まで確認することができるため，米国における社会保障制度についての初学者も事前知識を必要とせず読むことができるだろう．　（井上　希）